

ヨハネ福音書：結末が二つある理由- 2024.02.03

要旨

ヨハネの福音書には、20章と21章という二つの結末が存在するように見えます。20章が福音書としての目的を完結させているのに対し、21章は主イエスによる弟子の再召命と、その後の教会における歩みを示す重要な役割を担っています。本稿では、ペテロの回復とヨハネの証しという視点から、この不思議な結末の真意を紐解きます。

1. ヨハネの福音書の「二つの結末」

今回は、福音書の結末から逆に辿ることで全体を見直すという、ミステリーの謎解きのような視点でヨハネの福音書を取り上げます。

実は、このヨハネの福音書には結末が二つ存在します。まず、最終章である21章は、次のような言葉で締めくくられています。

「イエスの行われたことは、このほかにまだたくさんある。もしそれらをいちいち書きつけるなら、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う」

（ヨハネによる福音書 21章25節）

しかし、その手前の20章にも、同様の結末の言葉が記されているのです。

「イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子の前で行わされた」

（ヨハネによる福音書 20章30節）

そして20章は、こう続きます。

「これらのことをしてしたのは、あなたがたが、イエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」

(ヨハネによる福音書 20章31節)

これは、私たちがよく知る次の御言葉を思い起こさせます。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」

(ヨハネによる福音書 3章16節)

ヨハネの福音書において一貫して流れる大切なキーワードは「信じる」、そして「いのち」です。何度も「信じる」こと、そして「永遠のいのちが与えられる」ことが繰り返されており、これが福音書の中心テーマでした。ですから、この20章で物語が終わっても何ら不思議ではないのですが、実際にはさらに21章へと続いていくのです。

2. ガリラヤでの再召命と炭火の記憶

21章は、ガリラヤ湖畔でもう一度主イエスが弟子たちに現れた場面を描いています。弟子たちが漁に出るものの、一匹も取れずにいた時、主イエスが「舟の右の方に網をおろして見なさい」と声をかけられました。すると、引き上げることができないほどの大漁となったのです。

この出来事は、主イエスが最初に弟子たちを召された時の情景を彷彿とさせます（ルカ5章）。かつてヤコブやヨハネも共にいた時、「人間をとる漁師にしよう」と言われ、彼らはすべてを捨てて主に従いました。この21章のエピソードは、主イエスが改めてペテロたちを「弟子として再召命する」場面なのです。

陸に上がると、そこには炭火があり、その上には魚とパンが用意されていました。主イエスは弟子たちを食事に招かれます。その最中、主はペテロに三度「わたしを愛するか」と尋ねられました。これは、ペテロがかつて三度「あんな人は知らない」と主を否定した場面を強く連想させます。主が捕らえられた夜、大祭司の庭で炭火が焚かれており、ペテロはその傍らで暖まっていました。この海辺の食事の場でも、同じように炭火が赤々と燃えていたのです。

3. 「わたしを愛するか」の真意

主イエスとペテロの会話は、しばしば「悔い改め」という視点で解釈されます。また、ギリシャ語の「アガペー（神の愛）」と「フィレオ（友愛）」という言葉の使い分けから、主とペテロの心の機微を読み解こうとする説もあります。しかし、当時

の会話はギリシャ語ではなくアラム語かヘブル語で行われたはずですし、ヨハネの福音書内ではこの二つの語にそれほど厳密な区別はないようです。

最後の晚餐の時、主イエスは「弟子たちが皆つまずく」ことを予告されました。その時ペテロは「たとえ、ご一緒になければならないとしても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」と断言しましたが、他の弟子たちも皆それに同調しています（マタイ26章）。ですから、この21章での問い合わせに対しても、ペテロは弟子たちの代表として答えていた側面があります。三度の問答は、ペテロ個人の罪の問題というよりも、弟子たち全体の信仰の確認と捉えるべきでしょう。

また、「わたしを愛するか」という問いは、「わたしを信じるか」という問いと深く結びついています。ヨハネ16章27節で主イエスはこう言われました。「それはあなたがたが私を愛し、また私を神から出てきた者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられる」。「キリストを愛している」とは、すなわち「キリストは神から遣わされたメシアである」という告白でもあるのです。

「わたしを愛するか」という問い合わせに対し、ペテロは「はい、愛します」と断定するのではなく、「わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」と答えました。これはへりくだった態度とも取れますし、少し困惑しているように見えます。弟子として主を愛していることは自明のことなのに、「なぜ三度も聞かれるのだろうか」という意外な思いがあったのでしょうか。三度目に聞かれた時、ペテロは心を痛めました。これは、最後の晚餐で「裏切る者がいる」と言わされた時に、弟子たちが「まさか、わたしではないでしょう」と心を痛めた姿と重なります。

三度の問い合わせの後、主はいずれも「わたしの小羊を飼いなさい」と命じられました。

「イエスはシモン・ペテロに言われた、『ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人々が愛する以上に、わたしを愛するか』。ペテロは言った、『主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです』。イエスは彼に言わされた、『わたしの小羊を飼いなさい』」

（ヨハネによる福音書 21章15節）

ここで主イエスがペテロを「ヨハネの子シモン」と呼びかけていることにも注目すべきです。この呼び方は、ヨハネ1章42節で最初に弟子として召された時に「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをペテロ（岩）と呼ぶことにします」と言われた場面と同じ言い方です。つまり、この21章の場面は単なる赦しの場面ではなく、最初の召命に立ち返り、もう一度新たに弟子として召し直す「再召命」の意味を持っているのです。

主を愛し、信じる弟子であるならば、主と同じように羊を養う働きに携わること。それが、弟子たちに託された新たな使命でした。

4. ペテロの殉教と牧者としての歩み

続いて主イエスは、「よくよくあなたに言っておく」と前置きし、ペテロが年老いた時には自ら手を伸ばし、他人が帶を締めて行きたくない場所へ連れて行かれると語られました。これはペテロがどのような死に方をして神の栄光をあらわすか、すなわち、主と同じように十字架にかかるて殉教することを示唆していました。

その上で、主は「わたしに従ってきなさい」と言われます。かつて「人間をとる漁師になる」ためにすべてを捨てたペテロは、今度は「自分の命を捨てて主に従う」よう求められたのです。主イエスはかつてこう教えられました。

「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる」

(ヨハネによる福音書 10章11節)

弟子たちもまた、自らの命を惜しまず、善き牧者として歩まなければならぬということです。

かつてペテロは「命も捨てます」と豪語しましたが、主はその弱さを知った上で「あなたの信仰がなくならないように」と祈り、「立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と励まされました。ルカの福音書を併せて読むと、ペテロの挫折がサタンの策略であったことがわかります。

立ち直ったペテロは、後に「ペテロの手紙」を記します。その中で、信仰の試練の中で忍耐して栄光を見るよう教え、特に長老たちに対して次のように勧めています。

「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。……群れの模範となるべきである。そうすれば、大牧者が現れる時には、しぶむことのない栄光の冠を受けるであろう」

(ペテロの第一の手紙 5章2～4節)

まさに「詩篇第23篇」に歌われるような主の導きを体験したペテロが、大牧者のもとで群れを養う喜びを伝えているのです。

5. ヨハネの役割と大祭司のテーマ

「わたしに従ってきなさい」と言わされた後、ペテロはそばにいたヨハネを見て「主よ、この人はどうなのですか」と尋ねました。それに対し主は、次のような不思議

な答えを返されます。

「イエスは彼に言われた、『もし、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい』」

(ヨハネによる福音書 21章22節)

この「何の係わりがあるか」という言い方は、カナの婚宴でマリアに「ぶどう酒がなくなりました」と告げられた時の「の方、あなたは私と何の関係がありますか。私の時はまだ来ていません」という答えと同じ響きを持っています。人間の理解を超える神の計画が裏にある時、主はこのように答えられるようです。「今は説明できるものではない」という意味を含みつつ、それ以上の説明をされないのです。

このため、ペテロは死ぬがヨハネは死なないという噂が広まり、弟子たちは混乱しました。しかし主が語っているのは「死なない」ということではなく、ヨハネには別の固有の使命があるということです。

21章の結びには、「これらのことについて証しをし、またこれらのことと書いたのは、この弟子である」と記されています。ヨハネの福音書はバプテスマのヨハネの証言で始まり、一貫して主イエスについての証しを続けてきました。そして、その筆者であるヨハネは、後に「ヨハネの黙示録」を記すことになります。「わたしの来る時まで」という言葉は、まさに黙示録の預言と結びついており、その最後は「然り、私はすぐに来る。アーメン。主イエスよ、来てください」という言葉で締めくくられます。

至聖所に入り、神の言葉の栄光を目の当たりにしてすべてを証しする。これが、殉教の道を歩んだペテロとはまた異なる、ヨハネに与えられた固有の働きでした。

6. 結論：福音書の続きへ

ヨハネの福音書全体は、主イエスこそが真の「大祭司」であることを描き出しています。大祭司は自らの血をもって民を贖い出されました。その姿を、自らの命をかけて体現するしもべがペテロのような牧者たちです。また、天の至聖所に入って神の栄光を証しするヨハネの働きも、大祭司の務めと深く結びついています。

永遠の契約の血による羊の大牧者は、今も弟子たちを導き、栄光の座へとつかせてくださいます。

ヨハネの福音書において、20章は一つの「まとめ」であり、21章はこの福音書に続く「栄光ある弟子たちの働きの導入」となっているのです。